

菖蒲

り候、わきの上臈たちへ參らせ候て、そと御かけ候て、わきあけの程御かけ候。
 〔殿中申次記〕五月五日 一藥玉 禁裏様ヨリ參 一藥玉 伏見殿ヨリ參 但四日
 〔晴右記〕永祿八年五月五日、武家へ爲御使くす玉參候也、申次伊勢七郎左衛門也、

〔雍州府志七土產〕藥玉并燈籠 小川人家○中藥玉等物賣之、以彩絲作花枝、貼白紙上掛之於女兒背

後、是謂藥玉古以藥丸交其間避穢氣則中華所謂長命縷之類也。

〔日次紀事五月〕五日 端五今日端五節、中略女兒插菖蒲於頭髮、繫長命縷於背後、凡

日用之、後命修驗道山伏先達而令納大峯、

〔古今要覽稿時令〕あやめのこし菖蒲 あやめのこしは、五月三日平旦、六衛府より禁中へ奉れり、

藥玉料昌蒲蓬、抱興と、衛府式みえたるを始とせり、これよりして、あやめのこしの名目おこれる

也、六府立昌蒲興盆花各一荷、南庭と記

西宮

見えたる、又玄やうぶのこし、さうぶのこしともいへり、

いはゆる五月五日になりぬれば、御藥玉、玄やうぶのこしなどもてまゐりたるものと世繼見え、又

物語

見え、五月四日

三條の宮におはしますころ、五日のさうぶのこしなどもちてまゐりと清少納言見えたるによれ

ばくす玉の料、あるは御殿ごとに人々のぼり

て、ひまなくふきしこそ、みつの、あやめも、今はつきぬらんとみえしかと侍日記かけるによれ

ばくす玉の料、あるは御殿ごとにふくあやめを、興につみてかきもてありければ、とりまはしよき

故に、設けられしものなり、玄かるを後世はさなくして、別段あやめのこしをつくりなせり、これ

を

菖蒲

の御輿とも、又あやめの御殿ともいへり、其製法は、以連根菖蒲爲棟梁、且以細木爲柱造小

殿形、以檜葉并菖蒲蓋殿宇と日次見えたる、菖蒲の御殿とは、菖蒲を以て小き殿を作り物にして獻之

と故實

見えたり、昔は六衛府より奉りしかども、近世は東坊城家より獻せらる、よしなり、菖蒲

の御輿を、昔は六府左衛門、左右近衛、左右兵衛、より調進せし事古記にみえたり、近代は東坊城家より獻せら

ると夏山見えたる、菖蒲輿、東坊城家人副衛士土佐調進、下行壹石と行帳下見えたり、黒川道祐説に、菖蒲